

## 金原ひとみ『蛇にピアス』論

——再構築される身体とジェンダー——

### 一 はじめに

『蛇にピアス』は、第二七回すばる文学賞を受賞した金原ひとみのデビュー作である。二〇〇四年には、第一三〇回芥川龍之介賞（以下、芥川賞）を綿矢りさ『蹴りたい背中』（河出書房新社、二〇〇三年八月）と共に受賞した。綿矢が史上最年少の一九歳、金原もそれに次ぐ二〇歳で受賞したことにより、大きな話題になった。二作が掲載された『文藝春秋』（二〇〇四年三月）は、同誌の史上最多発行部数である一一八万部を記録している。特に『蛇にピアス』は内容の過激さから「風俗的な興味も掻き立てる衝撃作<sup>1)</sup>」として、文芸誌以外の雑誌やメディアに取り上げられることになる。久米依子はそうした評価

堀 川 なつみ

を認めながらも、「過激な性愛描写と新風俗を取り込んだ若い作家のデビュー作が社会的旋風を巻き起こす現象は、一つのパターンのように繰り返されている<sup>2)</sup>」と指摘し、村上龍『限りなく透明に近いブルー』（講談社、一九七六年七月）や山田詠美『ベッドタイムアイズ』（河出書房新社、一九八五年一月）の例を挙げた。『蛇にピアス』にこれらの先行作品と異なる意義があるとすれば、「現代日本ではもはや二〇歳の女性の小説中に激しい性描写があつても、社会的に許容され得ることを証明した<sup>3)</sup>」ことであると述べる。すばる文学賞の選評では辻仁成が「受賞後、十九歳と聞いて驚いたが、考えてみれば、これは十九歳だからこそ書くことができた作品でもあり、納得できた<sup>4)</sup>」、文庫本の解説では村上龍が「十九歳にし

か書けない方法と文体<sup>(5)</sup>」と、異なる評者でありながら「十九歳が書いた物語」であることが評価されており、久米の評はこれらに依拠するものだろう。

一方で、身体改造の痛々しさに異議を唱える評も多くある。たとえば、芥川賞の選評で石原慎太郎は「ピアスが象徴する現代の若者のフェティシズムが主題となっているが、私には現代の若もののピアスや入れ墨といった肉体に付着する装飾への執着の意味合いが本質的に理解できない<sup>(6)</sup>」、三浦哲郎は「身体改造をめざす人々の気持まではとても納得するには至らなかった<sup>(7)</sup>」としている。否定派の中には、描かれたのは衝動的な行為であり、「文学とは思えない<sup>(8)</sup>」と本作が持つ文学性そのものを疑う意見もあった。

以上のような『蛇にピアス』をめぐる否定的な評に反論するように、丸山茂は作品評価とは隔たった位置で分析を試みている。本作に描かれた若者には、「人格としての統一性を拒むような多面性を読み取ることができ<sup>(9)</sup>」<sup>(9)</sup>として、「若者」の世界に焦点を当てた論評に対し、「いずれの論評も人格の統合性の変化について、さしたる疑問を抱いていないところに、若者の焦燥感をいっそう募らせてしまう大人の世界がある<sup>(10)</sup>」と世代間の分断を

指摘した。スプリットタンや刺青は、若者の「自傷行為を通しての自己表現<sup>(11)</sup>」であり、不登校などの問題を抱えた青少年が行う「リストカットと同様な意味を持つて<sup>(12)</sup>」いる。その点で「見事に現代人の「アイデンティティ」を描いている<sup>(13)</sup>」と解釈した。しかし、藤沢周が身体改造は「いつもアイデンティティという幼稚な概念と背中合わせなのだが、その境界を真摯に見つめる眼差しがあつた<sup>(14)</sup>」と評しているように、不登校の青少年が行う「リストカット」とルイが行う身体改造の差異は慎重に検討する必要があるだろう。

以上、多数の同時代評を確認してきたところ、テキストに対する考察はこれほど分散しているのにもかかわらず、なぜ結論は「若者」という一義的な意味づけに収束してしまうのだろうか。それはS M的な性愛描写を「十九歳の作者が書いた<sup>(15)</sup>」ことに注目してしまったために、テキストが持つ異常な身体性を見失っているからである。先に引いた同時代評にしても、まず作者の年齢に着目して論を展開させており、内容への的確なアプローチは出来ていない。確かに金原は不登校や高校中退を経験し、スプリットタンも「本気でやってみようと思った<sup>(15)</sup>」と答えている。主人公・ルイは過去の体験に基づいて創造さ

れたキャラクターといえるだろう。しかし身体改造や激しい性愛行為は「全くそういう経験はな<sup>16</sup>」く、『蛇にピアス』は「私だけでなく、誰もが感じているだろう生きづらさを新しい形で表現した<sup>17</sup>」くて書いたとも答えている。完全に作者の分身ではないと考えられる以上、フィクションであることを意識し、作者とテクストに一線を引いて考察すべきではないだろうか。

よって、本論では「若者」の視点からアプローチを試みることは行わない。本稿ではピアスや刺青によって変化する登場人物の身体に着目する。そして、ルイの身体に施された刺青やスプリットタンが、身体に対していかなる効果を生み出しているかに迫りたい。

テクストの身体性に迫るためには、まず内容の詳細を確認しておく必要がある。ルイはクラブでアマと出会い、スプリットタンを初めて目にした。耳のピアスの拡張にハマっていたルイは興味を持ち、アマに着いていく。アマの紹介で刺青やピアスを取り扱うショップ「Desire」に来店し、オーナーのシバと出会って舌ピアスを開ける。シバによる施術後、偶然刺青のデザイン画が目に入り、何となく惹かれたルイは、シバに刺青の施術を依頼する。以降、スプリットタンと刺青の完成を目指し、

ルイの身体改造が始まる。

日が変わり、ルイ、アマ、そしてルイの友人・マキの三人で飲んだ帰り、ルイが男にナンパされた。怒ったアマが男を殴り、奥歯を無理矢理引き抜く。警察を呼ばれ、ルイはマキを逃がし、アマを連れて走り去る。何とか逃げ切った時、アマから男の歯を「愛の証」と言って渡される。

その後、ルイはアマに秘密でシバの店に通い、刺青のデザインの相談をする。龍だけ入れるつもりだったが、シバの体に入っている麒麟に強く惹かれ、両方入れてもらうことを決める。対価として肉体関係を求められ、シバとセックスをする。帰宅後、新聞でアマが殴ったと思われる男が死亡したことを知って、警察に見つからないようアマの髪を染める。

麒麟のデザイン画が完成し、シバの店にアマと一緒に行く。その帰り、三人で居酒屋に飲みに行く。

後日、シバの店に再び行き、刺青のライン彫り（筋彫り）をする。アマの龍とシバの麒麟を合わせたデザインを求めるが、画竜点睛の故事から目を入れないでほしいと頼む。

シバから警察がアマを探している情報を得る。その日、

アマが帰ってこなくなり、捜索願を提出した。その間、シバのところまで世話になるが、シバは突然ルイに手作りの結婚指輪を差し出し、プロポーズをする。

数日後、横須賀でアマの死体が発見された。ルイは錯乱状態になり、舌ピアスを無理に拡張したり、大量飲酒したり、自暴自棄な行動に走る。

悲しみに暮れる中、検察が出した煙草の銘柄、お香の種類がシバのものと一致したことが判明した。ルイは急いで別のお香を買いに行き、シバに髪を伸ばすよう命じる。そしてアマが殴り殺した男の歯を砕いて飲み込み、「アマの愛の証」を「私」にする。00G直前でルイは舌ピアスを外し、スプリットタンを完成させず、自分の中に流れる「川」を感じる。刺青の龍と麒麟に目を入れ、窓から差し込む日の光を疎ましく思うのだった。

本作に登場するルイ・アマ・シバという三人の関係は、身体という「もの」を提供し、改造することで成り立っている。たとえば、シバはルイとアマにスプリットタンと刺青を施術した。アマはルイにスプリットタンを教え、恋人となりセックスをする。そして、ルイは二人に染髪を施した。

大西永昭は、テキスト上の三人の関係を「所有」の関

係に当てはめて分析している。「所有というのは悲しい」という感覚的な言葉によって、ルイは、所有がモノの物神性を剝奪して無価値なモノへと貶め、やがてその先に放棄があることを理解している<sup>(19)</sup>とし、三人の恋愛の行方を考察した。「欲しくて欲しくて仕方なかった服やバッグ」も所有されてしまえば、所有される以前の価値は失われる。こうした所有の在り方が、モノだけではなく対人間においても適用される、とルイは考えている<sup>(20)</sup>が、アマとの関係においては「所有―放棄」を拒否している。二人の性交渉は、シバとルイが行う性交渉と異なり、「もの」の対価として行われていない。名前や家族構成の情報をも剝奪した二人の関係は、所有も放棄もないのである。やがて、この関係はアマの死亡（おそらくシバの仕業）によって破綻する。アマの死後、「愛の証」である男の歯を飲み込む行為は「愛の同一化」であり、「愛する対象と同一化してしまえば、もうそれ以上、放棄されることに怯えることはない。所有―放棄のサイクルは閉じ、世界はただ「私」という自己の中でのみ完結される<sup>(21)</sup>」。他者による所有が必要なくなったルイは、龍と麒麟の刺青に目を入れ、「自己完結した存在として生きていく<sup>(22)</sup>」と結論づけられている。

後年の『マザーズ』（新潮社、二〇一一年七月）などの作品において、田中弥生は「金原ひとみは、苦痛を受け、変形を強いられ、他人のための道具になっていく体、客体化した、ものとしての身体を主題とする作家<sup>23)</sup>」として評価しており、『蛇にピアス』にもその萌芽が窺える。

大西がいう身体を「もの」とした「所有」の關係には妥当性があると考えられよう。しかし、陳晨が指摘する「金原ひとみの作品には、作中に登場する視点人物が殆ど女性であるということから女性性や女性の感覚が多く描かれていることが確認できる。その女性たちは、つねに何かに苦しめられており、苦しみの正体が一度も明らかされていないために、どんどん不機嫌になる」ことについて<sup>24)</sup>は看過されている。「不機嫌になる」女性は『蛇にピアス』も例外ではない。ラストシーンにおいてルイは「陽の光が眩しすぎて、私は少し目を細め」（二二四頁）<sup>25)</sup>るが、次のように並べてみると、これは序盤のシーンと類似した描写であることが明らかとなる。

電車に乗って、アマの家に向かう。駅から家までの道、家族連れが多い商店街で、うるさい人々の声に吐き気を覚えた。ゆっくり歩く私の足に、子供がぶ

つかった。私の顔を見て、素知らぬ顔をするその子の母親。私を見上げて泣き出しそうな顔をする子供。舌打ちをして先を急いだ。こんな世界にいたくないと、強く思った。とことん、暗い世界で身を燃やしたい、とも思った。（略）とにかく陽の光の届かない、アンダーグラウンドの住人になりたい。（四九頁）

このとき、ルイの身体改造の経過は舌ピアスを開けたのみで、刺青の施術は行われていない。そして刺青の完成後においても同じく「陽の光」を嫌う描写がされているということは、刺青がルイにとって「アイデンティティー」を形成するものや「自己完結した存在」をもたらすものではないことの証左である。つまり、『蛇にピアス』のルイは何かを求めて身体改造を行うが、問題が解決されないためにつねに「不機嫌」であり、大西論はこの理由を分析するまでに至っていない。したがって、この論には大きく二つの課題が残されているといえるだろう。

一つ目は、ルイの人格や思考が不統合であることの答えを導き出せていないことだ。刺青は当初目を入れない予定だったが、結局目を入れて完成されたものとなる。

スプリットタンにおいては、穴の開いた舌を見ながら「00Gに拡張したら、川の流れはもっと激しくなるんだろうか、なんて考えていた」（二二四頁）。一度は「デンタルフロスをパチンと切」（二二二頁）り、完成させなかったスプリットタンへの道を再び考えている。計画通り遂行されず、未完の身体改造とルイが「不機嫌」な状態が維持されることは、身体にいかなる効果を付与するだろうか。

二つ目は、完全な刺青を完成させたことによってシバの支配下に入った可能性が残されていることだ。大西が言う「所有」の關係に当てはめるならば、ルイとアマの体を自分の意思通りに変形させたシバは支配者のままではないだろうか。半永久的に身体に残る刺青とピアスは、シバから離れた後もルイの体に残り続ける。それはアマも同じだった。警察が男を殴り殺したアマを探してシバを訪ねたのは、「龍の刺青」が入っていたからである。遺体で発見されたアマが全身負傷しているながら「龍の刺青」が入っていることで判別されたことから、本作では刺青が人物を表す記号の一つとして死後も残り、機能することがわかる。そして刺青はシバによってファイリングされていく。つまり、ルイの身体は刺青に目が入る

ことによって、シバの作品として成立したにすぎないと捉えることも十分可能だろう。

しかし、シバが支配者のままあり続けると確定するには疑問が残る。ルイに目のない刺青を彫り終わった後、「俺、彫り師やめようかな」（八一頁）と言うシバの腕の麒麟は、「まるでそこに君臨するかのようには鋭い目をして、私を睨んでいた」（八一頁）。シバの麒麟の刺青は「日本でトップクラスの彫り師」（三六頁）が彫ったものであり、ここではシバが被支配側に位置しているとも言えよう。このように、支配者と被支配者両方の側面を持つシバは、本作においてどのような位置付けにされているか明らかにしたい。

具体的には、第二章で内容を追いながらルイの身体観について明らかにする。そして人格の非一貫性を読み解き、そのことが身体におけるジェンダーの問題といかなる関係を持つのか明らかにする。第三章ではジュディ・ス・パトラの『ジェンダー・トラブル』（竹村和子訳、青土社、一九九九年四月）の理論を用いて、ルイの身体改造が「失敗」した理由を考察する。そして、この「失敗」がルイの身体にとってどのような意味を持つのかを結論づける。また、シバがもつ身体性とジェンダーが、

ルイとアマにいかなる影響を与えうるかも同時に明らかにした。

## 二 身体改造の経緯と意味づけの拒否

まずは本作における、肝要な要素である身体改造の経緯について整理しておきたい。竹内清己は、本作をほぼ時間の流れに沿った一〇個のパーツから成る四部構成と見ている。第一部が身体改造との出会い、第二部が刺青の相談とアマが起こした事件・アルバイトのこと、第三部が目のない刺青の完成、第四部がアマの失踪である。第二部から第三部にかけては主に刺青の施術を進め、舌ピアスは第一部から第四部に向け、刺青の施術経過に則して徐々に拡張されていき、第四部で加速する。

第一部では、ルイが *Desire* で刺青の依頼をする。「ここって、スミもやってるんですか?」(八頁)から始まり、「刺青、やってみようかな」(九頁)までの間に示されたのは、アマが登場する回想のみである。

アマと知り合ったあの日、私はアマの部屋にお持ち帰りされた。(略)それからアマは舌を切り離す映像をネットで公開しているアンダーグラウンド系の

サイトにいき、その映像を私はアマが呆れるほど繰り返し何度も見た。その後、私はアマと寝た。寝た後、左の二の腕から背中にかけての龍の刺青をカッコいいでしょー? と自慢するアマを受け流しつつ、スプリットタンを完成させたら刺青もやってみようと思った。(九頁)

アマが刺青を「カッコいい」と自慢しても「受け流し」、むしろ舌の切断動画に関心を持つ。アマと出会った時、ルイはスプリットタンを「……すごい」(三頁)と言い、「カッコいい」とは評価しなかった。アマの外見にしても、「暗いテクノシカかけないクラブ」(二六頁)で見えて「はつきり言ってる私は引いていた」(二六頁)と述べる。美醜に関しては「アマは別にかっこ悪い訳ではない。目つきは悪いけど、むしろカッコいい部類に入る方だと思う。ただ刺青と顔面のピアスが、カッコいいとか悪いとかの問題じゃなくしている」(五三頁)と言う。「カッコいいとか悪いとかの」問題は、同じく第一部で「はつきり言ってる00を超えてしまうとどこかの民族みたいで、カッコいいとか悪いとかの話ではなくなってしまう」(五頁)とはほぼ同じ言葉を用いて表現された。ルイ

が身体改造に踏み出したのは耳の拡張だが、それを見た時の「かっこいいね」(五頁)とスプリットタンに対する「……すごい」(三頁)、そして刺青に対する意識は、微妙に異なることが読み取れる。

武藤功は本作に書かれた身体改造に関して、「審美の関心によるものよりも、身体のもつ暴力的な本質への眼差しがとらえたものである」と評している。シバと初対面の場面では、顔中に刺さっているピアスを見て「こんなに武装されたら、表情なんてわからない」(八頁)と書かれている。「武装」という言葉で表現されるように、ルイにとつて刺青は「かっこいい」と表現される審美の対象にならないことは一定の妥当性があるといえる。しかし、「暴力的な本質」と表現された事柄については、再検討する必要があるだろう。

武藤は「暴力的な本質」を「多数の若者たちの現象に見られる風俗的な身体への自覚の一つにすぎなかった」としながらも、それを乗り越えたのは「自意識ならぬ身体意識ともいえるべき苦痛と恍惚の状況を書き出すことに成功したから」だと述べる。確かにルイはピアシングの場面においてそのような身体感覚を持っているが、全篇を通してそのことが書かれたわけではない。

それでは、ルイはどのような身体観に拠って改造を進め、身体感覚を変化させていったのだろうか。第一部でルイはシバの身体観に同意を示しており、第一部から第三部においては次の会話の内容を基盤に身体改造を推し進めていく。

「シバさんはスプリットタン、どう思います？」／シバさんは、ん？　と首をひねった。／「ピアスや刺青と違って、形を変えるもんだからね。おもしろい発想だとは思うけど、俺はやりたいとは思わないね。俺は、人の形を変えるのは、神だけに与えられた特権だと思ってるから」／シバさんの言葉は、何故かすごく説得力があつて、私は大きく頷いた。(二三頁)

ルイはこの言葉を受け、「神の特権……上等だ。私が神になってやる」(二八頁)と宣言している。第一部でのルイの目的は自らの身体を変形させることだったといえよう。つまり、ルイは自らの身体は自らでコントロールできるものと仮定しており、「神」が創造したとされる自然的な状態から逸脱することに意識を向けている。そ



れゆえに、舌ピアスの施術直前まで「手が汗ば」(二一頁)むほど恐れていたのに、ピアスが入る瞬間「イク時なんかよりもずっと強烈な戦慄に、私は鳥肌を立ててヒクツと痙攣した」(二一、二二頁)のだ。逸脱の一步を踏み出したルイは「よく分からない。でも嬉しい気がする」(二八頁)と、身体を自ら変形させる感覚を捉えたことで痛みと同時に快楽を覚えたのである。

しかし、ルイは目のない刺青が完成した第四部で活力を喪失する。その代わり、舌ピアスの拡張が加速していく。

アマは拡張するテンポが早いんだよ、と言ったけど、私は急がなきゃと思った。末期癌と告知された訳でもないのに、時間がないと感じた。(八五頁)

この時のルイの舌ピアスは4Gであり、一ヶ月前は6Gだった。刺青の施術前が10Gで、「デザイン構想から四ヶ月が経っていた」(八一頁)ことを踏まえると、おそらく二倍の速さで拡張を進めているのだらう。そして、アマの失踪後には「昨日2Gだった」(二〇二頁)舌ピアスを「大台の0G」(二〇二頁)に拡張する。なぜルイは

刺青を入れ終えた後で舌ピアスの拡張を急ぐののだろうか。そしてアマが失踪することでそれは激化するのだろうか。田川とも子は「文身をはじめとする古来の身体加工には審美的な装飾以外に、切実な理由があった」<sup>(29)</sup>と述べている。もちろん一七世紀以降は「誰もが関係する通過儀礼的なものではな<sup>(30)</sup>く、「つねに強い拒絶反応を示す多数と対峙する」<sup>(31)</sup>ものであり、ルイ自身そうした背景に拠って施術したのではない。

しかし、興味深いのはルイが第四部において古来の身体改造とはほぼ同じ形をとることである。田川は古来「誰かの死に際して自身の身体を傷つけることで哀悼するという慣習」<sup>(32)</sup>があり、「最愛の人や王の死に即して、舌に孔をうがったり、歯を砕いたり、焼きごてを押しつけたり、指を切り落とすという部族も珍しくない」<sup>(33)</sup>と述べる。もちろんそこには刺青も含まれる。舌と歯については、第四部のアマの失踪以降、似た行為が書かれている。

歯を食いしばっていると、顎が痛くなった。虫歯だった奥歯が欠けていた。私は欠けた歯を砕いて飲み込んだ。(二〇一頁)

私はアマと二人で使っていたジュエリーボックスを開け、ピアスを取り出した。昨日2Gにしたばかりで、到底普通に入る訳ないから、短い角型のピアスを選んだ。大台の0G。(略)ピアスを差し込むと、真ん中まで入れたところでピリピリした痛みが走った。(一〇二頁)

どちらの場合も「痛み」のみが感覚として書かれており、初めて舌ピアスを開けた時の「エクスタシーと同じよう」(一二頁)な快楽はない。そして刺青においては「いくよ……シバさんの言葉と共に、私の背中に懐かしい痛みが走った」(一二二頁)と「痛み」が過去のものとして書かれており、第一部の痛みと快楽が混同した感覚とは異なる。

もう一つ、「痛み」の感覚のように第一部と第四部で異なる要素がある。それはルイの身体改造の目的である。第一部では、「私が神になつてやる」(一八頁)と自らが身体を作り替えることを目的にしていたのに対し、第四部では「私はアマが言っていたように、アマと同じ気持ちを持ち共有したくてスプリットタンを目指していたのかもしれない」(二一四頁)と書かれている。

アマの身体改造に対する意識は第二部で明らかにされている。アマは初めてルイの友人・マキに対面した時、「何か、怖くてごめんね」(二三頁)と謝罪した。外見がもたらす印象を自覚しているが、ルイと同様「武装」しているわけではない。

アマはしょっちゅうガラの悪い男にからまれている。ガンくれただの、ぶつかつただの、いちゃもんをつけられて。でもアマはいつもヘラヘラ笑つて「ごめんね」というだけだ。パンクはパンクでも、中身はただのヘタレだ。(二五頁)

アマは刺青を「かっこいい」と自慢していたことから、美意識を持つて身体改造に挑んだ可能性はあるだろう。だがルイに身体改造を勧める際には、審美的身体装飾のためというよりも意識の共有を優先している。たとえば、ルイとの初対面で「君も、身体改造してみない？」(三三頁)、ルイがシバから彫り師であることを教えられた時は「俺もここで入れたんだ」(九頁)、舌ピアスを開けた後「嬉しい気がする」と答えたルイに「そうか、良かった。俺は、お前と気持ちを共有したいんだよ」(二八頁)

と書かれている。アマにとって身体とは、他者と共有することによって機能するアイテムであり、同じ装飾を施すことは、一種のカテゴリに属することを意味する。

「ギヤル」と呼ばれるルイに「ルイさあ、眉ピと口ピもしなよ。全部おそろにしようよ」(二四頁)と提案するのは、そうした身体意識が根柢になっている。

ルイははじめそれに対抗していたものの、徐々にアマの身体観に近づいていく。

ゆっくり歩く私の足に、子供がぶつかった。私の顔を見て、素知らぬ顔をするその子の母親。私を見上げて泣き出しそうな顔をする子供。舌打ちをして先を急いだ。こんな世界にいたくないと、強く思った。とことん、暗い世界で身を燃やしたい、とも思った。(四八頁)

アマがアマデウスで、シバさんが神の子なら、私はただの一般人で構わない。ただ、とにかく陽の光の届かない、アンダーグラウンドの住人でいたい。子供の笑い声やセレナーデが届かない場所はないのだろうか。(四九頁)

でも今はアマの気持ちがかかる。私も今、外見で判断されることを望んでいる。陽が差さない場所がこの世にないのなら自分自身を影にしてしまう方法はないかと、模索している。(五三頁)

ルイの身体改造の目的が「アマと身体を共有すること」に変わったのなら、身体改造への意味づけは可能だろう。たとえば、「所有」の関係に当て嵌め、目がある刺青と穴が空いた舌を自らのものとし、「アイデンティティー」の形成という意味を付与することもできる。

しかし、ルイはまた活力を失う。「アマも熱意もなくなってしまった以上、この舌ピに一体何の意味があるんだろう」(二四頁)というように、二転三転するルイの思考は、序論で述べたとおり同時代評が混沌とする原因になっていると考えられる。ならば、ルイが活力を失う理由を問い詰めるのは不可能といつて良い。ルイは繰り返し「意味なんてない」(八〇頁)と、身体改造への意味づけを拒否した。龍と麒麟に目を入れる場面においては「この刺青には意味があると自負できる」(二二頁)としたが、スプリットタンを中断した場面では「この、無様にぽっかりと空いた穴を、求めていたのだろうか」

(二二二頁)と問いを残し、「00Gに拡張したら、川の流  
れはもっと激しくなるだろうか(二二四頁)と身体改  
造の行方を曖昧にしている。ルイの身体改造は、川上弘  
美の言葉を借りるならば「特権的な描きかた」<sup>34</sup>をされて  
いるものではない。

このように整理すると、ルイの身体改造には「アイデ  
ンティティ」という意味づけを拒否する性質がある。こ  
とが推測できる。しかし意味づけが不可能であることを  
主張するだけでは、なぜルイが「不機嫌」なままであり、  
「異常」な身体に執着するのかを分析することはできな  
い。本作は単行本化にあたり改稿を経ているが、未完の  
身体改造がルイの身体においてどのような意味を持つか  
を検討することで、ルイの「不機嫌」と「異常」な身  
体の関係を見出せるかもしれない。

### 三 再構築される身体

「自らの身体を自らで作り替えること」、つまり「神  
の特権」を得ることがルイの当初の目的だと前章で考察  
した。それが達成されないために「不機嫌」に陥るのだ  
と仮定すると、「神の特権」を得ることがルイにとって  
何をもたらすのかという問いが残る。そして重要なのは、

「神の特権」の有無にかかわらず——身体改造が達成さ  
れてもされなくても——ルイはつねに「不機嫌」である  
ことだ。そのうえで、ルイの身体に向けられる眼差しは  
身体改造への欲望の契機となるものとして指摘可能だろ  
う。第二部のコンパニオンのアルバイトの場面では次の  
ような描写がなされている。

はつきり言って、スーツを着こんだエリートに興味  
はないし、彼等だつて舌を出しているような女に興  
味はないだろう。気だての良い日本女性を装った私  
は、どこのパーティーでもたくさん名刺を渡される  
けど、結局私のイメージは全てが作り物。スプリッ  
トタンを完成させたら、このバイトも出来なくなる。  
早く穴を広げたいと、舌を鏡に映して思った。(六  
〇頁)

ここでいう「私のイメージ」の「全て」は、一義的な  
意味に留まらない。ルイが「気だての良い日本女性」な  
のはアルバイトの時のみで、普段は「キャミソールワン  
ピースに、金の巻き毛」(二二頁)をした「ギャル」の姿  
をしている。しかし、「ギャル」の姿こそがルイの真の

「イメージ」だと結びつけることはできないだろう。なぜならば、ルイは初対面のシバに「ギャルも舌ピとかするんだ」(六頁)と言われた時、「ギャルじゃないです」(七頁)と否定しているからだ。さらにこの否定は、物語が幕を下ろすまで一度も覆されることがない。二〇〇〇年代に流行した「ギャル」と似た身体を装っておきながら否定を続け、それを破壊させるように身体改造を進めていく。ルイは第二部において、「ギャル」の身体に刻まれるピアスや刺青が身体に違和感を生じさせると自覚している。「私がやりたいのは舌ピじゃない、スプリットタンだ」(二二頁)と語り、破壊の衝撃をこう述べている。

初めてアマのスプリットタンを見た時、明らかに自分の中の価値観が音を立てて崩れていくのが分かった。何がどう変わったかは分からないけど、私は一瞬にしてあの舌に魅了された。でも魅了はされたけど、それで私もやりたいと思ったわけじゃない。どうしてこんなに血が騒ぐのか、その理由を知りたくてスプリットタンに向かってひた走っているような気がする。(二二頁、二三頁)

先行研究において久米依子は、「ギャル」の身体に付随する「イメージ」を「性に開放的と評される」<sup>36)</sup>女性としていた。しかしそれが後付けされた事柄であり、さらに単に「ギャル」と述べるにせよ様々なカテゴリーがあり、発展や派生を繰り返すことには言及していない。ルイの身体に向けられた視線は、「ギャル」や「気だての悪い日本女性」、つまり「女」の身体に求められる一律の「規範」を露呈させる。ジュディス・バトラーは「セックス」と呼ばれるこの構築物こそ、ジェンダーと同様に、社会的に構築されたもの<sup>37)</sup>とし、いわゆる生物学的な身体差を、つねに作り変えられるパフォーマティブな行為とした。そして、藤高和輝が説明するように「バトラーがジェンダーを「パフォーマンス」として捉えるときに強調するのは、「行為」は一方でそれが対象を「構築する」だけでなく、その行為自身が文化的、社会的慣習を反復するよう強制されるものである<sup>38)</sup>」と見なすならば、どのような考察が可能となるだろうか。たとえば、「女性はスカートを履く」慣習は、「スカートを履く」ことがしばらく「女」のみ与えられたことで、その行為に「女性性」が付与され、慣習として位置づけられていく。そして「スカートを履く」行為が、学校や職

場に限らず多くのフォーマルな場で「規範」として反復・強制される。これらは自分の意思で「選択」するものとは言い難い。だが「スカートを履かない女」や「スカートを履く男」が存在可能であるように、決定的ないし本質的なものでもない。「パフォーマティブ」な「行為」はつねに「規範」を反復・強制しながらも、それを裏切る可能性をも含んでいるのだ。これに則して言うならば、ルイの身体に向けられる眼差しとは、「女」の身体を規範の中に留まることを反復させ、強制させる行為である。しかしルイは「女」の身体を改造することで規範の反復・強制に抵抗し、飛び出そうとした。

破壊と復活の行為の場として選んだのが「女」の身体だとすると、その行為が身体に与えた成果を確認しなければならぬ。とりわけ刺青は、身体に与えられるジェンダーを色濃く示している。

「マキ、スミってどう思う？」／「スミって刺青？刺青はいーんじゃない？ 薔薇とか、蝶とか可愛いじゃん」／ニコニコしてそう答えるマキ。／「そうじゃなくて、龍とかトライバルとか浮世絵とか、可愛くないやつ」／マキは顔を曇らせて、はあ？ と

大きな声を出し、どーしちゃったのよ？ と私に詰め寄った。(二二頁)

刺青になされる「可愛い／可愛くない」の評価は、刺青がもつ歴史的なジェンダー性を反映しているだろう。「十七世紀以降の刺青は、鴉や火消し、飛脚など、裸になる機会が多い職業の人々に好まれる身体装飾にとどまり、特に「和彫り」と呼ばれる絵柄は男性の身体に彫られた。ルイは「女」の身体に男性性を付随させることで同一化を試み、「女」のカテゴリーを破壊し、再構築を実践しようとした。「洗脳、そうかもしれない」(二二頁)と書かれているように、ルイの身体改造はアマやシバという男性の身体と同一化する行為だったといえよう。そして、ルイの身体改造が「失敗」する理由もそこにあると考えられる。なぜなら、男性の身体もまた同様に多様であり、それに同一化して脱構築しようとしても、「女」の身体を抑圧してきた対象と同じ構造に陥ることになるからだ。それは「その主体そのものが「多層的な権力配置」(Griener)<sup>40</sup>のなかでいかに形成されるのかという点を見逃してしまふ」。規範とコピーの関係について、バトラーは次のように述べる。

「規範的なもの」が存在するという感覚を失うことは、笑いの原因となりうるし、とくに「規範的なもの」もコピーであり、しかもかならず失敗するコピーであり、誰もそれを具現化できない理念であることがあきらかにされた場合は、とくにそうである<sup>(4)</sup>。

ルイの身体改造が「失敗」してしまうのは、「かならず「失敗」するコピー」を繰り返すからである。そのため刺青という一つの目標を失い、スプリットタンにも期待出来なくなり、規範の中から出ることは不可能であるパラドックスに気づけば、「活力という物が全くない」(八三頁)くなっていた。だからアマという「規範」がいなくなってしまうえば、「無様にぼっかりと空いた穴」(二二二頁)となつて攪乱の契機を逃してしまうのである。パトラーは「セックス」と「ジェンダー」の二分化に際して、ボーヴォワールの理論を「性別化された身体は数多くの異なつたジェンダーの契機となりえるし、さらには、ジェンダーそれ自体が通常のように二つのジェンダーに限定される必要もない」と解釈したうえで、次のように述べている。

もしもセックスがジェンダーを制約するものでないならば、セックスの二分法と見えるものに限定されないジェンダー——性別化された身体の文化的な解釈——が多数あるということになるだろう。もしもジェンダーとは、ひとが(なる)ものであつて、もともとそうで(ある)わけではないものならば、ジェンダーは一種の(なること)——つまり営為——であつて、ジェンダーは名詞や、実体的な事柄や、固定した文化のしるしづけとしてではなく、ある種の不断の反復行為とみなすべきだとも、結びついていないならば、ジェンダーは、セックスの二分法と見えるものによつて押しつけられる二元的な制約をこえて増殖する可能性をもつ行為ということになる。<sup>(43)</sup>

身体改造による再構築の「行為」は、言動の因果というよりも、身体自体がすでに規範の中で制限されていて、自らでコントロールできる「ファッション」的なアイテムではない。つまり、服を選び取るように意思に基づいた「行為」とは異なるということである。身体が主体をもち、規範を攪乱する可能性があるとしたら、規範の中にある。そして規範的なジェンダーを脅かし、意味をず

らそうとしていると考えられる人物は、ルイだけでは  
ない。シバも同様の性質をもち、身体を再構築しようとす  
る。ルイが同一化を試みる対象の一つだったシバは、第  
二部でルイにバイセクシュアルであると告白する。

「でも俺、男でもイケるよ。結構広範囲でイケる方  
だと思うけど」／シバさんが笑って言った。その言  
葉で、アマとシバさんがヤツているところを想像し  
てみた。案外、美しいかもしれない。(四一頁)

シバが殺したであろうアマが、死亡する前にレイプさ  
れていたことが判明した後、検察が「雨田さん、バイセ  
クシュアルの気はありませんでしたか？」(一一六頁)と  
問うたのも、シバがバイセクシュアルである可能性を高  
めている。そうであるならば、シバがアマに向ける眼差  
しを無視することも出来ないだろう。次の引用は、ル  
イ・シバ・アマで食事をしている場面である。

私たちはビールで乾杯して、刺青の話でヒートアッ  
プした。(略)その時、私はシバさんが楽しそうに  
しているのを初めて見た事に気づいた。二人でいる

時には決して見せなかつた顔だった。(六五頁)

シバはルイだけでなく、アマにも特別な感情を抱いて  
いたとする。では、アマを殺害しルイに求婚するに到  
までの非一貫性が、テキスト上でどう機能するのか。シ  
バがルイに求婚する場面は次のように書かれている。

「お前、俺と結婚しない？」／シバさんはセックス  
した後、寝台に寝そべる私の隣に座り、タバコに火  
を点けて言った。／「話がしたいって、その事だっ  
たの？」／「まあ、ね。アマは、お前の手に負える  
ような相手じゃないし、お前は、アマの手に負える  
ような相手じゃない。とにかく、バランスが悪いん  
だよ、お前らは」／「だから俺と結婚しろって？」  
／「いや、別に。まあ、それとは関係なしに。何と  
なく結婚、してえと思ってさ」(九二頁)

異性愛的な結婚の形式を取りながら、理由は曖昧にさ  
れている点においても、シバの不明瞭さが目立つ。ルイ  
は「バランスが悪い、っていうのはどういう事だろう」  
(九三頁)とシバの台詞を反芻するが、この答えは明確



にされていない。終盤において、シバがアマの殺人犯である可能性が示唆された時、ルイはアマの時と同様、髪型を変えることを提案する。

「ううん。何も。そうだ、キツキ、髪の毛伸ばしてよ。私ね、長髪が好きなの」／私の言葉に、シバさんは笑った。前だったら、きつと「うるせえ」とか言って冷たい目でにらんでいただろう。(二二〇、一

二二頁)

これはルイがアマに対して行った行為の繰り返しであり、シバがいう「バランスが悪い」関係の意味は損なわれる。しかし、それが無意味だと主張したいわけではない。むしろ、シバが規範の中に留まり、異性愛的な結婚——「反復され強制される行為を実践することによって、「自然」なもの起源を否定するのである。「解剖学的なセックスと、ジェンダー・アイデンティティと、ジェンダーパフォーマンス」が統一されずにシバの身体に与えられていることを、バトラーの言葉を借りて「異装」とする。これが異性愛という規範に迎合するものであるにせよ、「それは同時に、異性愛の首尾一貫性という規

則的な虚構をつうじて統一性として誤って自然化されているジェンダー経験のさまざまな局面が、それぞれまったく別物だということを明らかにするものである<sup>(45)</sup>。ルイの舌に穴を穿ち、背中に刺青を彫ったシバは、ルイの身体改造を「失敗」させ、ジェンダーの構造的な「失敗」を証明した。そしてシバ自身も、「結婚」という手段を用いることで規範の中に「ズレ」を生じさせ、転覆の可能性を生み出したのである。

異性愛者の男性として表象されるアマがルイの中に取り込まれることによって、一旦「転覆は完了したように思われる。歯を砕いて飲み込み、「アマの愛の証は、私の身体に溶け込み、私になった」(二二〇、二二二頁)と書かれた場面で、アマはルイと同一化したように見える。アマがルイの身体で完全に被支配者として取り込まれたのならば、規範は再び確固な存在として強制されるものになるだろう。しかし、ルイは施術中のスプリットタンを中断してしまう。「無様にはつきり空いた穴」(二二二頁)は「自分の中に川が出来たように、涼やかな水が私という体の下流へと流れ落ちていった」(二二三頁)と表現され、規範が流動的でつねに完成されないことを示唆する。「OGに拡張したら、川の流れはもっと激しくな

るのだろうか」（二二四頁）とさらなる転覆の可能性を暗示しながら、本作は幕を下ろす。

こうして「男／女」という二項対立を身体によって破壊し、「失敗」と契機の生み出しを繰り返すことは、身体がジェンダーによって構築されるものを意味することに他ならない。ジェンダー化された身体をコントロールすることが不可能な規範の中で、「失敗」や成功への契機を生み出しながら転覆させ、攪乱する登場人物たちは、物語をより不安定にさせる。それこそが規範の不安定性をそのまま示している。本作はこうした身体的実践によって、規範の再構築に挑戦するものである。

#### 四 おわりに

『蛇にピアス』はルイが「女」の身体を改造することによって、既存の規範に転覆の可能性をもたらずテクストであると論じた。ルイの「不機嫌」の対象は、「女」の身体に反復・強制させられる規範——「ギャル」や「気だての良い日本女性」に表れる「女」の身体にあるべき女性性——である。ルイがそれに抵抗し、「不機嫌な女」の状態を維持することは、「女」の身体がつねにジェンダーによって構築され、制度化された中で苦痛を

受けることを意味する。しかし、テクストは現在のジェンダー制度における「女」の立場を無責任に批判するだけではない。身体を改造することによって、ルイは規範からの逸脱を試みる。そして抵抗の契機として男性の身体への同一化を図るが、それは「失敗」に終わる。なぜなら、男性の身体もすでにジェンダー化されており、ルイが考える規範の外に出ることは決して出来ないからだ。第二章ではジュディス・バトラーの理論を用いて、テクストが自然な身体という幻想を破壊し得ることを考察した。規範の中でジェンダー化された身体を改造したり、異性愛的な結婚を選択したり、自然的であると考えられる要素に「ズレ」を生じさせることで、ジェンダー化された身体を攪乱してみせるのである。規範の中で転覆に挑戦する存在として描かれているのが、シバである。シバはバイセクシュアルであり、ルイ・アマ双方に特別な感情を抱いておきながら、最後にはルイに求婚し、異性愛的な規範の中に留まろうとする。一見規範に迎合するような行動でありながらも、同時に、確固とされた規範が単一的なものでないことも表していると解釈できよう。さらに言えば、これはバトラーが「強制的異性愛」として批判してきたことだが、登場人物たちの身体改造はバ

トラノ理論が分析する「身体」の限界に挑戦している。

バトラノはつねにジェンダー化された身体について思考を続けてきた。『ジェンダー・トラブル』の序文で「ジェンダーの行為をパフォーミングタイプだとみなす考え方に基づいて、一連のパロディ的な実践を、身体というカテゴリーを脱自然化し意味づけなおす戦略として提示し、記述する<sup>(45)</sup>」と宣言し、成功したといえる。しかし、今ここに実体として存在する肉体に与えられる「苦痛」には言及しなかったように思える。つまり、「女」の身体をもつことで女性性を押しつけられたり、犯罪に巻き込まれたりするような生々しい現実の問題からすれば、実際の「身体感覚」から乖離する傾向も、その理論には含まれていたのではないだろうか。『蛇にピアス』はそれを「痛み」として表象し、肉体の上に「身体感覚」を取り戻した。本作の身体は、ピアスや刺青、セックスにおける「痛み」や「快楽」を受けて改造され、カテゴライズされた身体を再構築してみせる。生々しい感覚を身体に書き込み、描写することで、肉体として実在する身体を再構築する。もちろんこれが従来の二元的なセックス／ジェンダー論に退行するわけではない。肉体と言語が「身体」を構築する過程で、どのような作用を生み出すか。こうした試みを繰り返す本作に、現代のジェンダー制度を攪乱する力があることを示したい。

#### 注

- (1) 久米依子「痛みへの希求」(岩淵宏子・長谷川啓編『ジェンダーで読む愛・性・家族』東京堂出版、二〇〇六年一〇月、一〇二頁)。
- (2) 久米、前掲、一〇二頁。
- (3) 久米、前掲、一〇三頁。
- (4) 辻仁成「厳しい世界へ、ようこそ」(『すばる』二〇〇三年一月、一四三頁)。
- (5) 村上龍「解説」(金原ひとみ『蛇にピアス』集英社文庫、二〇〇六年六月、一一二頁)。
- (6) 石原慎太郎「現代における青春の形」(『文藝春秋』二〇〇四年三月、三一五頁)。
- (7) 三浦哲郎「感想」(『文藝春秋』二〇〇四年三月、三八頁)。
- (8) 早坂茂三「文学とは思えない」(『文藝春秋』二〇〇四年四月、二二一頁)。
- (9) 丸山茂「論壇時評 若者——生と死あるいは「蛇にピアス」」(『神奈川大学評論』第四七号、二〇〇四年三月、一三五頁)。
- (10) 右同。
- (11) 丸山、前掲、一三七頁。
- (12) 丸山、前掲、一三七頁。

- (13) 丸山、前掲、一四〇頁。
- (14) 藤沢周「疑うという冒険」(『すばる』二〇〇三年一月、一四四頁)。
- (15) 細貝さやか「受賞者インタビュー 金原ひとみ」(『すばる』二〇〇三年一月、一四六頁)。
- (16) 日豪プレス「著名人インタビュー 金原ひとみさん」  
[https://nichigopress.jp/interview/celebrity\\_interview/2630/](https://nichigopress.jp/interview/celebrity_interview/2630/)、二〇一〇年一月二二日閲覧。
- (17) 細貝さやか、前掲、一四七頁。
- (18) 「ピアスのサイズはゲージという単位で表され、Gと略される。ゲージは、数が小さくなっていく程太くなっていく。普通の、耳のファーストピアスは、大体16Gから14Gで、太さは一・五ミリ程度。0Gの上は00Gで、これが九・五ミリ程度」(金原ひとみ『蛇にピアス』集英社、二〇〇四年一月、四頁)。ルイの舌ピアスは14Gから始まり、00Gで終了した。
- (19) 大西永昭「非・所有の恋愛論——所有から同一化へ向けて——金原ひとみ『蛇にピアス』」(『近代文学試論』第四号、二〇〇六年二月、一〇二頁)。
- (20) 大西、前掲、一〇二頁。
- (21) 大西、前掲、一〇八頁。
- (22) 大西、前掲、一〇八頁。
- (23) 田中弥生「金原ひとみの「私」曼荼羅」(『スリリングな女たち』講談社、二〇一二年九月、一〇六頁)。
- (24) 陳農「身体を望ましき混沌として「書く」金原ひとみ『マザーズ』における不機嫌な女たちをみる」
- (25) 『Juncure 超域的日本文化研究』第六号、二〇一五年三月、一八五頁)。
- (26) 竹内清己「金原ひとみ『蛇にピアス』——「刺青」と「美しさと哀しみ」との行方」(『国文学 解釈と鑑賞』第七三巻第四号、二〇〇八年四月、一七四頁)。
- (27) 武藤、前掲、二五〇頁。
- (28) 武藤、前掲、二五〇頁。
- (29) 田川ともこ「文身とタトゥー——交又する身体」(成美弘至編『コスプレする社会——サブカルチャーの身体文化』せりか書房、二〇〇九年六月、一七四頁)。「文身」は「皮膚に傷を入れて色素などを注入し、文様や文字を定着させる身体加工方法のこと」(田川、前掲、一七三頁)。刺青と同じ手法を用いるが、傷を治療せずにわざと残す、あるいは故意に傷をつける根性焼きなども含まれる。
- (30) 山本芳美「秘める刺青、見せるタトゥー——日本と台湾から」(成美弘至編『コスプレする社会——サブカルチャーの身体文化』前掲、一四三頁)。
- (31) 山本、前掲、一四四頁。
- (32) 田川、前掲、一七六頁。
- (33) 田川、前掲、一七六頁。
- (34) 川上弘美「厄介さ」(『すばる』二〇〇三年一月、一四一頁)。

- (35) 初出では、アマを殺した犯人がシバである疑惑が登場した場面で終わる。単行本化に際して、ルイの刺青が目が入る場面とスプリットタンを中絶する場面が追加された。本論では未完の身体改造が身体にいかなる可能性を示すか明らかにするため、単行本のテキストを採用している。
- (36) 久米、前掲、一〇三頁。
- (37) ジュデイス・バトラー『ジェンダー・トラブル フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳、青土社、一九九九年四月、二二八、二一九頁。
- (38) 藤高和輝『ジュデイス・バトラー 生と哲学を賭けた闘い』以文社、二〇一八年三月、一六八頁。
- (39) 山本、前掲、一四三、一四四頁。
- (40) 藤高、前掲、一三七頁。
- (41) バトラー、前掲、二四四頁。なお傍点は原文に拠るものである。
- (42) バトラー、前掲、二〇二頁。
- (43) バトラー、前掲、二〇二頁。
- (44) バトラー、前掲、二四二頁。
- (45) バトラー、前掲、一二頁。

(付記) 引用文中の「／」は改行を意味する。引用文献はすべて初版を用いた。

本稿は令和二年度卒業論文を改訂したものである。ご指導賜った泉谷瞬先生の学恩に感謝申し上げます。